

心と身体の科学

佐藤喜世恵・石川久美
中村明彦・山本裕二*

【抄録】 「心とからだ動くことの意味・心とからだの解放—心とからだへの気づき」・「先端医療から考える“生”」・「老い・病・障害を通して心と身体を考える」という3つの視点から生徒へアプローチした。多様な角度から「心と身体の科学」という同テーマについて生徒に迫ることで、自己や他者を尊重する感覚を養い、ストレス社会を生き抜くために、様々な問題を熟慮して選択できる、生きる力に結びつくと考えた。今年度は担当者が前年と変わらなかったため、昨年と比較検討することも可能になった。

【キーワード】 心と身体 「ヒト 人 人間」 気づき ロールプレー 疑似体験 討論会 分かち合い 生徒の揺らぎ

1. はじめに

高校生にとって、「ひと」というと何を思い浮かべるのであろうか。生物としての「ヒト」だろうか。個としての「人」だろうか。社会の中の「人間」だろうか。「ひと」が生き物である以上、様々な変化は免れることはできない。時間の経過とともに訪れる変化—心や身体の変化、もっと大きな流れの中での時代の変化—地球環境の変化や価値観の変化、個人の変化—家族や生活環境の変化、生徒は、これら多くの変化に生き方を変化させて適応できるだけの能力を持たなければならない。そのためには、柔軟な考え方、多方面から分析する力、ストレスに対処する力など、多くの能力が必要である。

思い通りになると考えていた身体が、実は心の状態で大きく縛られていたり、大変だと考えていた状況が、実は当たり前のことだったり、最先端で最も良いと考えていたことが、実は結論が出せないほど迷い悩むことであったり、といった「え、今まで考えていたことと違う、想像していたのと違う」という体験をさせたり、「自分が今、考えなくてはならない問題だと思っていた」課題の重大性に気付かせることによって、生徒が揺れ動くことを大切にしたい。そして「ちょっと待って、もう一度考え直してみよう、トライしてみよう、いろいろな意見を聞いてみよう」という歩み寄りの気持ちや再構築しようとする気持ちを育てていきたいと考えた。

そして、「心と身体」について様々な角度からアプローチすることにより、自己や他者を尊重する感覚を養い、ストレス社会を生き抜くために、様々な問題を熟慮して選択できる力、生きる力に結びつくと考えた。

以上のようなことを踏まえて、「新教科群—心と身体の科学」の授業実践を報告する。

*名古屋大学総合保健体育科学センター助教授

2. 指導の方法

(1)対象生徒

高校1年生（119名—40/40/39名の3クラス）

(2)実施方法

前期 週1回1時間 0.5単位 全14回

各クラスにて、保健体育、理科、養護の教員がチームティーチング、3テーマで展開

展開人数表（人）

	山本・中村グループ	石川グループ	佐藤グループ	計
A組	15	10	15	40
B組	15	13	12	40
C組	19	9	11	39
計	49	32	38	119

3. 指導目標

(1)中村・山本先生グループ

・「心とからだ動くことの意味・心とからだの解放—心とからだへの気づき」というテーマで、実験・実習・観察を通して、意欲的に取り組み、進んで探求し、心と身体につながりについての考えや、思い通りになる身体、ならない身体について、多角的に自分自身の考えを的確に表現できるようにする。

(2)石川グループ

・「先端医療から考える“生”」というテーマで、単に先端医療の原理を学ぶだけではなく、医療技術のもつ意味と影響についても考える。また、人にとってどこからが“生”でどこからが“死”なのかを考え、先端医療に対

して自分自身で総合的に判断できる力の基盤を持つことができるようにする。

テーマで、高齢者体験、車いす体験、介助体験、点字など多くの体験を通して、社会的弱者の諸問題について考え、医療の進歩による倫理問題についても多様な角度から判断できる力を持つことができるようにする。

(3)佐藤グループ

・「古い、病、障害を通して心と身体を考える」という

4. 活動内容

教官	山本裕二・中村明彦	石川久美	佐藤喜世恵
テーマ	「こころとからだが動くことの意味・こころとからだの解放—こころとからだへの気づき」	「先端医療から考える“生”」	「古い・病・障害を通して心と身体を考える」
4月14日	オリエンテーション 担当教員よりグループの活動内容の説明、グループ分けの希望調査		
4月21日	合同授業(山本) 運動制御と学習 3グループのつながりの理解—生物としての「ヒト」、個としての「人」、社会の中の「人間」		
4月28日	自分の身体は制御可能か(山本) *石川グループと合同	体が動くとはどういうことを生物学的に考える *山本グループと合同	障害とは 目、耳の不自由な人、話すことが不自由な人、内部障害、精神障害、自閉症
5月12日 3クラス 合同	エゴグラム TEGテスト 自分を知らう	脳死から考える“生と死” 小討論会	視覚障害者講演 外部講師 目のみえない生活 盲学校の様子
5月19日	言葉と身体運動の繋がり 「心と身体が繋がっている」「思い通りになる身体・ならない身体」を体験	脳死と脳死移植の現状と問題点	点字学習 礼状作成
5月26日	体ほぐし① 「心身相関」の仕組みと体ほぐしの運動に触れる	脳死ロールプレイ 脳死宣告と家族会議をそれぞれの役で演じる	高齢者疑似体験 80歳を体験する
6月2日	体ほぐし② 「体への気づき」「体の調整」「仲間との交流」を実際に体験する	再生医療・ES細胞・クローンの基礎知識を学ぶ	車いす体験 外部講師 介助する側、介助される側の気持ち
6月9日	移乗と着脱の介助時のからだの動かし方 *佐藤グループと合同	先端医療から考える“生” 小討論会	移乗と着脱の介助から「介助」について考える *山本、中村グループと合同
6月16日	イメージトレーニング(山本)	人による生命の選択① あるダウン症の方の生活をビデオから学び、中絶、着床前診断、出生前診断で選別される命について考える 感想文の記入 7/14に分ち合い *石川・佐藤グループと合同	
6月30日	中間発表会準備		

7月 7日	中間発表会 1	
7月 14日	フィードバック (山本)	中間発表会 2 6 / 16の授業についての分かち合い 次回討論会テーマの決定
9月 8日	メンタルトレーニング (山本)	人による生命の選択② 小討論会「売買される受精卵・人体部品」 「障害のあるなしの基準」 *石川・佐藤グループと合同
9月 29日	小論文・アンケート	

(文責 佐藤喜世恵)

5. 生徒の取り組みの様子

(1)中村・山本先生グループ

「心とからだ動くことの意味・心とからだの解放—心とからだへの気づき」

生徒の取り組みの様子が、分かりやすく現れているので、生徒の感想を以下に抜粋する。

○言葉は身体運動に影響するかと言う内容では、本当に言葉のコミュニケーションがないととても不自由なんだと考えさせられた。体ほぐしの運動を通して、運動には心とからだをリフレッシュさせることもできるんだあと、疲れるだけではないんだと考えさせられた。ストレスマネジメントを通してストレスを未然に防ぐことを考えさせられた。普段日常では学べないことを専門の先生に学ぶ機会を与えられたことはとても新鮮で様々な刺激を受け止められ、楽しみながら学ぶことができました。(Mさん)

○人のからだはやはり心とつながっているんだと、改めて思いました。この授業を受けて、普段何気なくやっている動作も、実は心とつながっているということを実感しました。心で思っていることはからだに出るし、からだの調子も心に出してしまうと思うようになりました。だから、心身の健康ということばの意味をはっきり確認することができました。この授業は、いつも改めて実感することばかりなので、とても驚きます。当たり前と思っていた何気ない動作の一つ一つにもちゃんと意味があって、どこかつながりをもっているのだということがわかったので、私たちの体は未知の部分が多いと思えました。(Iさん)

○授業というよりも考える時間という感じでした。実際に体験してみても「何だろう」「不思議だ」「大変だ」など思ったことはたくさんあります。体験したからこそ、

話ではなく自分で実感することからこそ考えが深まるのではないかと思いました。(Kさん)

○普段何気なく行っている行動にも、それについて詳しく調べてみると、とても深い意味があったりします。例えば落とした鉛筆を拾うにしても、脳から「拾う」ためのさまざまな命令が出て最終的に腕の筋肉が動き拾うことができる。という流れを瞬間的に行います。つかむ力やつかみ方も生きてきた経験により体が覚えていることにより、つかむことができる。普通では「なぜ？」と思わないことを習い体験することで心とからだに関する興味が深まりました。(Mくん)

○新教科の授業は、勉強とは違った人間としての必要性がすごくある、大切な授業だったんだと振り返って思った。心とからだのつながりについて考えるというテーマで半年間授業を受けて、以前まで当たり前すぎて深く考えたこともなかったような自分や他人の行動などをことあるごとに意識するようになったと思う。ちょっとした仕草などで「新教科でやったことのあることだ・・・」とふと気づいたり、人が行動するときいつも心の様々な変化が関わっているのだと実感できるようになった。この授業を受ける前までは、心とからだは「心」と「からだ」という別のイメージが強かったけど、心と身体が如何に密接であるかということがわかった。(Yさん)

(文責 中村明彦)

(2)石川グループ

「先端医療から考える“生”」

受精卵診断、脳死移植など、生命の誕生や死に関わる先端医療技術は日々進歩している。先端医療の発達によって、生と死の境界線も変化した。生徒たちが、これらの技術の原理を理解して、利用するかしないかを判断しなければならないという事態に直面することも考えられる。

また、生活様式の変化により、生徒たちが“生命の誕生”や“死”に立ち会う機会は減少している。核家族化によって親族の“生”や“死”に接することが減っただけではなく、“生と死”は病院で起こる現象となった。高層マンションの増加によって、人のみでなく、人以外の動物の誕生と死に直接関わることも少なくなった。

理科や保健の授業で、受精卵から始まる生命の誕生のしくみなどについては教えるが、それらのもつ意味や、日々進歩している先端医療の原理、またそれらが私たちの生活や社会に与える影響までは扱っていない。

このグループでは、最初に移植の歴史を学び、脳死と脳死移植について学習した。脳死の学習では最初に脳死の定義を資料から抜き出してプリントに整理するという作業を行った。そしてその脳死という概念は、脳死移植を行うときだけ使われる“死の定義”であることを学んだ。

次にドナーカードを資料として全員に渡した。ドナーカードを配って説明をすると、何人かの生徒は記入を始める。しかし、安易にドナーカードに記入することが万が一にもあってはならないが、生徒の家族に影響することがないとは言えない。そこで、「どうしても書きたい人は、この講座が終わって、十分に脳死移植について理解して、家族に与える影響まで十分に考えたと判断してからにして欲しい」と伝えて、記入した生徒には消してもらった。

その後の学習で、臓器提供した家族や臓器提供を受けた人の悩みをビデオで知り、脳死移植の問題点を考え、ドナーカードに記入することの家族への影響まで考えた生徒は、次のように書いている。

「カードに丸をつけるのはすごく簡単だけど、深く考えなくてはいけないなあ・・・と思った。また心の問題も大きいなあと感じた。臓器移植は自分が思っているよりもっと大きな問題だと分かった。」(Tさん)「あげる人、受け取る人それぞれに悩みがあったりして、臓器移植はとても重要な問題で先生が今ここでカードを書かないで欲しいと言った気持ちがわかった気がしました。」(T, Tさん)「移植の意思表示なんて自分がいいと思えば簡単にできそうって思ってたけどすごく難しいんだなって思った。」(M, Yさん)「脳死移植をした家族が“正しい判断だったのか”と思うのは、当然だけど、それで70人の人が救われるならいいって初めはすごく思ったけど、これは**第3者だから**言えるのかも知れない。やっぱり**自分が家族だったら**すごく考えると思った。正しいか、正しくないか結論出しづらい」(A, Tさん)

下線部のように、自分だけの問題ではないことに気づき、いろいろな立場に立って多角的に考えようとする姿勢が見られた。そして最後のA, Tさんのように、考えが揺らぐことを素直に表現している生徒も多かった。

この講座を担当して3年目となるが、この脳死移植の問題を扱うことは慎重にしなければならないと年々感じる。その大きな原因は次の生徒のように、“親族が脳死になった”という体験をした者が増えたからである。

「私の祖父も4月に脳死という判定を受け、亡くなりました。まだ傷ついてない心臓や臓器。脳が死んでいるだけで、臓器はなんともなっていないのに・・・。だから脳が戻ってくれるんじゃないのかってという思いもあった。そんな感情をまた思い出しました。この感情が本当に良いものかどうか考えていきたいと思いました。」(Y, Sさん)

脳死という状態を保つことができ、脳死判定ができる医療機関は日本の中でも限られている。世界の中で考えれば、ほんの一握りである。しかし、経済的に恵まれた日本にいる本校生徒たちにとってはすでに脳死は“身近な問題”となりつつあるのである。

脳死移植の場面を再現するロールプレイで立場の違う人の役をすることで、脳死移植に関わる問題点を感じる体験を行った。しかし、この活動を行うときも、上記のような生徒がいることを常に念頭において声かけをしなければならない。

「先端医療から考える“生”」グループの前半の活動は皮膚移植から始まって、様々な移植が可能になり、とうとう心臓まで移植できるようになったという流れで行った。つまり、今までならば助からなかった患者さんがこれだけ助かるようになったと伝えた。最初に基礎知識として伝えた時点では、全体としてはだが、“先端医療はすばらしい”という印象をもつものが多かった。“**かつては死んでいた人が生きられる**”という事実は先端医療を肯定する非常にインパクトの大きな根拠だからである。そこで、ビデオを見せながら次々と問題点をあげると生徒たちは前述のように迷い出す。命はあっても罪悪感や免疫抑制剤の副作用に苦しむこともあるという事実を知って、単に“生きられる”だけではだめなのだ気付く生徒も出てくる。さらに様々な立場に立って考えてさらに迷う。中には、「家族にはもらっても生きて欲しいけど、人にはあげたくないのは自己中心的だ」とやや自己嫌悪的に考える生徒も出る。

そしてこの時点で“ES細胞から臓器を作る可能性”について説明すると、他人からもらうという大きなハードルがなくなるために、多くの生徒が脳死移植より問題点が少ないと考える。しかしそこには、ES細胞の材料となる受精卵や卵が必要であるという別の問題が控えている。そして、後半のどこから“生”かと考える活動へと繋がるのである。

(文責 石川久美)

(3)佐藤グループ

「若い、病、障害を通して心と身体を考える」

様々な体験を通して生徒の感性に迫った。どんな体験が生徒にとって印象に残っているか、自由記述式アンケートを実施した。集計結果を以下の通りである。

複数回答あり

最も印象に残った体験項目	記入人数	記入率
車いす体験	22 (人)	58 (%)
高齢者体験	20	53
討論会	24	63
点字でのお礼状作成	12	32
視覚障害者の講演	8	21
着脱の介助	6	16

上記の集計は、生徒が記述した文章の中で書かれていたキーワードをカウントした結果である。短時間で実施できる着脱の介助より、身体を使ってある程度の時間、しんどい思いをしたものや、じっくり考え、意見を述べた授業は印象が残ったようだ。

中間発表会で、他のグループに取り組みを紹介した時の紹介文を以下に抜粋する。

車いす体験について

私の場合、老人ホームでボランティアしたり、入院したりしたので簡単にできると思ってたけど、実際はすごく大変でした。病院や老人ホームはバリアフリーで、比較的スムーズに行けたけど、学校では段差や坂道、デコボコした道は、本当に大変で疲れました。あと視線がみんなより低いので、見下されているようにも感じました。これからは、絶対に自転車を放置することをやめて、少しでも通りやすくしようと思いました。

坂が登れないし、段差は2センチくらいですごく走行の障害になりました。目線も普通よりかなり低かった。物も高い所があると届きません。たった少しの場所しか移動していないのに、走行するのがこれだけ大変だと、町に出るとなると、どんなに移動が難しいことなのか想像できました。また、てっきり独りで使うことができるものだと思っていましたが、助けが無いと無理であるということも気づきました。段差なども練習すれば一人で登れるのかと思っていましたが、助けてくれる人がいても大変で、改めて車いすの不自由さを考えさせられました。

視覚障害者の講演について

目に見えないということは、テレビや新聞などの情報を得ることが出来ないため、今の情報化社会の中でとても苦勞するということがわかりました。しかし、インターネットの音声で情報を得ることができると知り驚きました。また、障害者の人は自分で出来ることは積極的にやっているの、何でも手伝うより、困った時だけ手伝ってほしいんだということもわかりました。それは私

たちも同じだと思うし、何もかもしてもらうのは迷惑だと感じてしまうと思いました。

移乗と着脱の介助について (山本・中村グループと合同授業)

よくよく考えてみればわかることなのですが、老いや病によって体がうまく動かせない人は、服を着ることも出来ないんだということに改めて気づき、その大変さを身をもって感じさせられました。看護をすること自体、一人に付き一人いればいいもののだとばかり思っていました。これも大きな間違いで、たった一人の助けではどうにもならないことが日常の中でも多くあることがわかりました。しっかり相手のことを思いやり、気遣いながら看護をしなければならないという当たり前のことを、少し忘れてしまっていた気がします。自分が様々な人と付き合ったり、助け合ったりしていく上で、とても重要で、こういったことに気付くことが、僕にとって初めの一歩なんだと感じました。

多くの体験を通して多くのことを感じて、感想や意見を出し合い、他人の考えを受容できるようになってほしい。そんな教える側の願いは伝わっていたような気がする。そして、もっと生徒に揺さぶりをかけ、深く考えてほしいために、石川グループとの合同授業を展開した。

(4)石川・佐藤グループ合同授業

後半2回を石川グループ(最先端医療から考える“生”)と、佐藤グループ(若い、病、障害を通して心と身体を考える)が合同で授業を展開した。石川グループは、「かつては助からなかった人が生きられる」、先端医療を肯定する方向から学び、佐藤グループは、「生きにくい状況にある人々」、社会的弱者の立場から学んだ。合同授業では、生徒が多角的に考えられるように、安易に結論が出せない問題を提起した。科学進歩の結果、生まれてくるはずの人が排除されてしまうという現実、逆に、排除されずに生まれてきた人たちが生きてきたという現実、両方向から生徒に突きつけた。生徒の考えが「揺らぐ」良い機会を得たようだ。生徒は悩み、結論が出ない問題について深く討論していた。「数個の受精卵の中から遺伝的疾患の無い良いものだけを子宮内膜に着床させるというやり方で、残った受精卵はみんな捨ててしまうのです。僕は真っ向から反対します。そんなことするなら子どもを産まないで下さいというくらいに、そのやり方が気に入りません。賛成できません。」と強く話していた生徒も、討論が進むに連れて、自分は意見を変えないが、受精卵診断をしたいという人の立場や気持ちも何となくわかる、良いとは言えないが悪いとも言えないというような意見に変化する場面もあった。逆に安易に先端医療に賛成していた生徒の方からは、家族に障害者がいる生徒や、家

族を無くした経験のある生徒の意見を聞いて、命の重みを感じ取り、きれい事を言っているだけではないその意見の背景を考え、揺らいでいる生徒もいた。どの生徒も、結論が出ない問題を深く考える大切さを感じ取ったようだ。以下に、生徒が最後の授業で記した感想文の抜粋を掲載する。

・新教科では、生きるという事の中身に触れたような気がします。何らかの問題を抱えて生まれてきた場合、不幸と考えるのか。障害とは何か、何が障害で、何が障害でないのか。一人一人が意見を持ち、みんなに発表する。そして、みんなの意見も取り入れる。あまり生々しい話やそんな問題に接していないから、ショックという事もあった。本当に悩んで出した結果、選択があるならば、その選択に良い悪いは無いのだと思った。

・生ということを考えさせられました。他人がする事と、自分がすることでは、意見が違ったことがとても印象的でした。例えば、遺伝子診断について、他人がしたいと言ったら、「子供は親を選べないのに、親が子供を選ぶなんて。」と思うけれど、自分の子のことになるとやっぱり健康で障害の無い子が生まれてほしいと思うのは当然で遺伝子診断をしてしまうかもしれないです。命の選別という言葉が重く心にのしかかりました。

・小学校の時、障害をもった子のクラスがあって、その時はその子がどんな障害を持っているのか全然知りませんでした。新教科でダウン症を知って、そのクラスの何人かはダウン症だと知りました。自分の周りにそういう人たちがいたのに、どんな障害か知らないで、会わなくなって4年経って知るなんてだめだなあと思いました。そういうことを知ったということは、これからプラスになると思います。

・新教科で、障害とは何なのか、どこからが障害とするのかということについて考えさせられました。世間

では障害と言われるようなものでも、本人次第で、障害ではなくなるかもしれない。また、その逆もあり得ると思ひ、前向きに生きることが大切だと思いました。また、受精卵診断の授業では、人が命を選ぶことについて考えました。そんなところまで人間がしているのか。選ばれなかった子供たちをどう考えるのか。そう考えると、受精卵診断は肯定できないけど、自分の子だったら、否定できないかも。人間は科学の力でいろいろなことをしてきました。それが良いか悪いか、それはとても難しく、答えはなかなか出ません。でも、それについて学び、話し合うことで、一歩ずつでも答えに近づいていけたらいいと思いました。

・この授業は、本当に答えがないと思った。車いす体験の時も、段差があって通りにくい道があった。でも、その段差をなくしても次々に問題が出てくると思う。それをフォローするのは人間の心だと思った。段差をなくすのではなく、みんなで段差を乗り越えることが大事だと思った。そんな大きなことはできないという人もいるかもしれないが、点字ブロックの上に自転車を置くのを止めるだけでも違うと思う。何かしてあげるといふことだけが人のためになっているとは限らない。

・新教科は毎回毎回新しい発見が多くて、その度にいろいろなことを考えてきました。たくさんのことを見て、聞いて、体験することで、新たな自分の考えと向き合うことが出来るから、とても大切だなあと思いました。別々の視点から見てきたグループと同じことをすることで、そういう考えもあるなとか、それもおもしろいなとか思った。広い視野で問題を見つけることができた。



佐藤グループ 車いす体験の様子

6. アンケート結果

2003.9.29、授業最終日に新教科について、高1全員にアンケートを実施した。()内の数字は質問に対して、肯定的な意見を選択した生徒の割合である。

1. 一つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点から知識が得られると思う。(81%)
2. 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。(93%)
3. 様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られたと思う。(72%)
4. 新教科で扱ったような「答えの出にくい問題」について学習することは大切だと思う。(88%)
5. 新教科で学習した問題に対して自分の意見や考えを持つようにしている。(69%)
6. 新教科で学習した知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。(61%)
7. 一つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えることができると思う。(72%)
8. 一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になると思う。(83%)
9. 新教科の授業を通して、自分の教養が深く広くなると思う。(80%)
10. 新教科の学習が、これからの自分の進路選択や自分の生き方の助けになると思う。(47%)
11. 新教科で学んだことを現実の生活や社会で役立てようと思う。(66%)
12. 新教科で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。(68%)
13. 新教科で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。(71%)
14. 新教科の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事項への関心が高くなると思う。(84%)
15. 新教科で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容も深く学ぶようになると思う。(44%)
16. 少人数で学習したため疑似体験など多様な活動ができると思う。(88%)
17. 新教科の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。(72%)
18. 3つのグループの中から選べることが意欲的に取り組むことにつながると思う。(74%)
19. 新教科で一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例、英語、国語)を意欲的に取り組むことにつながると思う。(63%)
20. 新教科で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。(9%)
21. 新教科は週1回では足りないので増やして欲しい。(18%)
22. 新教科を週1時間学ぶより他教科の学習がしたい。(5%)
23. 総合人間科より新教科のほうが、学習の目的がはっきりしていると思う。(37%)
24. 総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。(46%)
25. 新教科は総合人間科以外の他教科より、友人や教員などの「人と学びあう」機会が多いと思う。(72%)

7. 結果考察

今年度月曜日に授業があり、ハッピーマンデーで休みが多く、14回の授業であった。昨年は18回実施できたが、4回の差は大きかった。昨年度のように産婦人科医に来ていただく機会が取れなかったし、体験授業も削らざるを得なかった。後半の生徒への揺さぶりの時間も十分とは言えず、意見交換は、まず、前回の感想文一覧のプリントを配布して時間短縮し、それから、分かち合いの時間を設けたりした。担当教員自身も消化不足を強く感じた。前期アンケートでは、18%の生徒が、時間不足を感じているという結果であったが、自由記述の中に時間不足を記している生徒は、佐藤グループでは9名(佐藤グループ中24%)もいた。「いつもの教科と違う授業を受けることができたが、実際にそれが役に立つまでの範囲にまで至らず、浅い学習で終わってしまったような気がする。週に1時間で、その後を深めるのは生徒自身なのか

もしれませんが、とても重大なテーマで学んでいるにもかかわらず、足りなかったというのが正直な感想です。選択により人それぞれ違うということは、なかなか面白いが、発表会でしか、他のグループの活動を知る手段がないということに不満がある。全ての生徒が知るべき大切なことを行っているグループもあると思う。やはり、全体を通してみると、週1時間というのは短すぎる。」という辛口の感想を述べた者もいる。年度によって回数がこれだけ増減すると、同じ学習効果を期待することは難しいが、それを踏まえたくえで、指導計画をしたつもりであったが、今後より深く考慮すべき課題である。

また、担当者が昨年と変わらず、実践内容もあまり変化がなかったが、改善した点は、昨年度、中村グループと佐藤グループのクロスカリキュラムが少なかったため、今年は、移乗と着脱介助の実習を合同で行った。身体の動かし方という方向からのアプローチと身体を動かされた時の気持ちという方向からのアプローチ、2つの

方向から考えられることを生徒に示した。新たな試みのおかげで、グループのつながりを再認識できた。残念ながら、佐藤グループの自由記述式アンケート結果からみると、生徒のこの授業に対する印象は低かったようである。来年度も同じ教員が担当予定なので、今後、検討する時間を早い段階から設定し、生徒の心に残るアプローチ方法へと修正していきたい。

このような課題は残されているものの、今年度、前記アンケートでの数値結果から考えると、新教科の学習意義は大きいと判断できるし、生徒もしっかり、新教科のねらいを認識している。この成果を継続できるように、積極的に取り組み、推進していきたい。

(文責 佐藤喜世恵)

[参考文献]

- ・佐藤喜世恵、石川久美、中村明彦、山本裕二：心と身体の科学，名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要、第48集，2003
- ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校編著：「新しい中等教育へのメッセージ」，黎明書房，2003